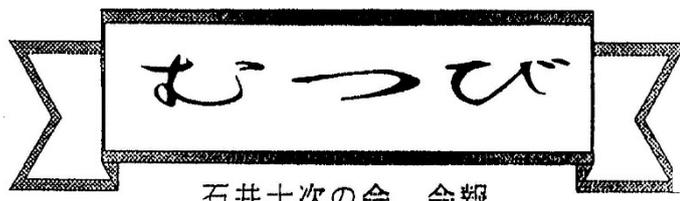


2021年  
(令和3年)  
9月10日



288号

## 良き社会人を育てるために

航空自衛隊 新田原基地司令 尾山 正樹

我々自衛隊は、人材育成を重視する組織であり、私は、部隊長として1000名以上の隊員育成の責任を負っています。国民が困難な状況にある危機において、国民の安全・安心を守るのが我々自衛官の使命であり、そのために普段から全力で教育し、訓練し、精強な自衛官を育成しています。起きてほしくない危機を敢えて想定し、それに対応するために鍛え備える、それが、危機に際して機能する組織となり、そして、抑止力として日本の平和に繋がると信じています。

我々自衛官は、良き自衛官である前に、良き社会人であるべきです。災害派遣や有事において、わが身の危険を顧みずに、他を守るために活動をするという仕事は、「相信相愛」の心を具備した良き社会人でないと、成し得ることが出来ません。また、我々の騒音を伴う教育・訓練は、地域の方々を含む国民の皆様のご理解が基盤であり、そのご理解を得るためにも、われわれ自衛官は、家族を愛し、地域を愛し、国を愛する良き社会人である必要があります。

私事、昨年秋に新田原基地に赴任し、コロナ禍の厳しい勤務環境下における隊員の育成に、時には悩み、時には、逞しい隊員の成長を喜ぶ日々を過ごしていたところ、石井十次の会 橋田会長にお会いし、「石井十次 資料館」をご紹介いただき、訪問することが出来ました。恥ずかしながら、石井十次先生を全く知らなかった私は、この偉人の生きざまと偉業を知り、深く感動しました。江戸時代末期1865年に高鍋藩藩士の長男として生まれ、高鍋学校を一等賞で卒業、その後ドラマチックな七転び八起きの人生を歩みます。海軍士官を目指して挫折、岩倉具視暗殺の疑いで収監、西郷隆盛に感化され開墾事業を起こすも断念、その後、警察の巡査となるが、哀れな女性を解放する過程で性病に罹患する。それをきっかけに医師に出会い、医学の道へ進む。しかしながら、孤児を救ったことを機会に天職に出会い、医書を焼き捨てて、孤児救済と教育に専心することを決意し、48歳までの生涯で沢山の子どもたちを世に送り出すのです。そして、その破天荒な偉業を導いたのは、

様々な理解者達と出会い、彼らを魅了し、深い信頼と多額の寄付を得ることに繋がった傑出した企画力と実行力、そして、愛の力です。

石井十次先生の生き様は、愛に溢れています。医学の道を諦め、孤児のために命を捨てて働こうとの決意は、徹底した利他主義を基礎としています。先生の孤児への愛に心打たれた多くの有力者たちは、相愛が連鎖し、主体的に孤児救済を支えていったのだと思います。

また、石井十次先生の「孤児教育方針」にも、愛があふれています。そこには、真に強い社会人を育てようという甘やかしのない強い愛情が感じられます。家族を愛し、各家庭の独自性を尊重した「家族主義」「委託主義」、貧しさが当たり前であった時代において腹いっぱい食べさせようという「満腹主義」。そして、その愛の深さに加えて、驚かされるのが、現代の教育に通じる合理的な教育方針です。家庭でも学校でも実行をもって模範を見せて導く「実行主義」、体罰を禁じた「非体罰主義」、現代のカウンセラーやコーチングに類似した個性を重視した「密室教育」等は、より輝きを増している教育手法です。

これらの教育方針は、優秀な自衛官、良き社会人を育てるための人材育成にもしっかり合致するものでありますし、これらの様々な方針に増して、「相信相愛」の心が人の育成に活かされると考えます。若き自衛官達の多くが、悩みと迷いを抱えています。堅いイメージの自衛官として生きていく将来への不安、任務が増加していくのに人員が増えない懸念、コロナ禍における団体生活の困難、SNS等で大量の「隣の青い芝」情報に晒される中で厳しい自衛官生活を送る戸惑い等。彼らZ世代（スマホやデジタルに幼少期から慣れている若者達）は厳しい指導だけでは、導けません。指導者と指導される側が、互いに信頼関係を築き、愛情を持って教育し、納得しないとついてきてくれません。

このコロナ禍においても周辺国の軍事活動は、より活発化し範囲を拡大しており、東アジアの安全保障環境が格段に厳しさを増す中において、将来の我が国の平和、アジアの安定を守るためにも、未来の平和を担う若き自衛官の育成は極めて重要だと考えます。

沢山の隊員を預かっていると、信じられないような失敗をしでかしたり、まさかと目を疑うような悪さをする者も稀にるのが現状です。それでも、全ては私の責任ですから、納得するためにも全隊員を我が子（自分より年上の子もいますが）と思うようにして、愛情を持って対応しています。二千数百人もの孤児たちを世に送り出した石井十次先生とは比較にもならない苦労ではありますが、地域の方々を含む国民の皆様の安心・安全のために、苦勞を楽しむ気概で、全力で強く優しい良き社会人を育成していく所存です。

## 10. 柿原政一郎、宮崎市長となる

昭和10年2月、宮崎市役所では職員集団的な税金使い込み事件が発覚し、市長、助役、収入役が引責辞任する非常事態となった。秋には都城で昭和天皇が臨席して陸軍大演習が挙行される。天皇は帰途にお召列車で宮崎市を訪問することになっていた。天皇の行幸があるのに市長なしではすまされない。緊急市議会は後任市長に柿原政一郎を選出し、内諾を得るために親友・岩切章太郎を特使として派遣した。政一郎は「無報酬の名誉市長」



を条件に内諾。7月11日に市議会は満場一致で正式に 県庁屋上で昭和天皇に説明する政一郎（後姿）柿原政一郎を市長に選任した。政一郎は議場で就任演説を行い、議場は割れるような拍手で応えた。「私は行政については全くの素人であるが、宮崎市が火事だと聞いて、バケツをひっさげて駆けつけました。一意献身の覚悟でございますので、なにとぞ皆様のご協力をお願いしたい」

11月15日、政一郎は県庁屋上に昭和天皇を迎え、宮崎市内を天皇に説明するという榮譽に浴した。正一は政一郎のこの榮譽を心から喜び、終生誇りとした。

## 11. 政一郎、宮崎市長を辞め、県議となり、その後高鍋町長となる

昭和12年、政一郎は県議会議員補欠選挙に市長在職のまま立候補し、当選すると市長を辞任し、県議となった。理由は県内の電力行政を正し、宮崎県を電力不足から救うためであった。小丸川水系に県営発電所を建設し、農業用水の確保も目指した。予算獲得にも成功し、川原発電所と石河内発電所の竣工を見た。しかし太平洋戦争激化に伴い、発電事業は国の統制下におかれ、開発した電力を宮崎県のために活用するという初期の目的は果たせなかった。



昭和13年、高鍋町議会は満場一致をもって町長に柿原政一郎を推挙した。政一郎は県議在籍のまま「無報酬の名誉町長」を条件に引き受けた。町民が期待したのは、「高鍋町と上江村」の合併であった。この合併はそれまで歴代の町長が試みたが、上江村の反発が激しく、成功しなかった。

政一郎は「対等合併を原則とし、町と村を同時に廃し、新制高鍋町とする」方式を提案し、賛同を得た。その年のうちに新制高鍋町は発足した。

その後、戦時色が濃くなり、行政には軍部が介入するようになる。平和主義者であった政一郎は軍部の干渉をきらい、開戦前に一切の公職から退いた。この決断は終戦後に幸運をもたらす。政一郎は公職追放令の対象にならず、戦後すぐに公職に復帰できたからである。

## 12. 正一、脳溢血で倒れ、73年の生涯を終える

昭和12年9月、正一は三納代駅から歩いて湯風呂に帰る途中で脳溢血を起し転倒した。政一郎の懸命な看病もむなしく、正一は10月11日、自宅で永眠した。享年73歳。湯風呂の農民たちは尊敬するリーダーの死を心から悼んだ。彼等は松の木を切ってひつぎ柩を作り、松やにを内面に塗り、茶の葉をぎっしりとつめ、その上に遺体を安置した。重さ300kgもある柩を白装束の若者たちがかつぎ、湯風呂で一番高い山の上に埋葬した。



正一は、こよなく愛した湯風呂の地で永遠の眠りについた。（終） 編集委員 石川正樹

# 《 お し ら せ 》

## ★新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】日高 亜紀 内田 マサ  
長友 さゆり

【西都市】岩切 一夫

## ★ご寄付をいただきました（敬称略） （奨学金基金へ）

【宮崎市】芥川 恵子 田村 祥子  
阿万 留美 松下さおり

【延岡市】菅家 幸子

## ★7/21～8/20の資料館来館者

団体・グループ	48人
個人	31人
計	79人

ここまでの掲載者は編集委員会開催  
の都合により8月20日までのものと  
しています。

## ★10月号の通信発送作業

10月12日(火) 9時から印刷・製本  
13日(水) 9時から印刷・製本

この会報は、宮崎県を中心に全国  
1700余の個人・団体に毎月送付し  
ています。

社会福祉法人 石井記念友愛社

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1  
後援会「石井十次の会」

TEL/FAX 0983-32-4612

メール

[yuuaisya-jyuujinokai@ki.ijo.jp](mailto:yuuaisya-jyuujinokai@ki.ijo.jp)

## ●十次墓地に建つ<sup>やすたなおよし</sup>安田尚義の歌碑

石井十次墓地の入口に十次没後20周年祭に建てられた歌人・安田尚義の歌碑があります。

「食尽きて兎ら飢うる時屋上に

坐して祈りしその声きこゆ」

安田尚義は明治17年4月、  
上江村平原に生まれました。母・  
あぐりは十次の妻・品子の姪だ  
ったので、尚義は「幼少から十  
次には親しくしてもらった」と  
いいます。高鍋藩の絵師の家柄  
でしたが尚義は画家の道をえ  
らばず、早稲田大学史学科に



十次墓地入口に建つ尚義の歌碑

進み教職につきます。短歌にも打ち込み、歌人・太田水  
穂主宰の「潮音社」に参加します。明治39年11月に  
東京歌舞伎座で孤児院慈善演芸会が催されると、学生だ  
った尚義は十次に頼まれ、1週間にわたり側近として知  
名の士の接待にあたりました。

大正2年4月、尚義は健康を害し高鍋に帰って静養  
します。健康が回復した11月に茶臼原で病床にあった  
十次を見舞いにでかけます。自宅から1里半の山道を歩  
いて行くと、十次は医師の往診をうけていました。しば  
らくして辰子夫人が「診察が終わりましたからどうぞ」  
と呼びにきます。十次は床の上に起きていて尚義を見ると、「もうこの辺まで歩いて来られるようになったか」と声をかけてくれました。見舞いにきたのに、逆に見舞いの言葉をかけられて尚義はおどろきました。この記憶を尚義は一生忘れませんでした。

尚義は、晩年は郷里高鍋に住み、歌集「<sup>けんけんしゅう</sup>虔々集」を  
発行し、また高鍋史友会を設立するなど、郷里の文化向  
上にも尽くし、昭和43年1月、高鍋町名誉町民の称号  
を受けます。昭和49年1月没。享年91歳。

## \*編集後記

「むつび」巻頭の1～2頁は新田原基地司令・尾山正樹  
様に玉稿をいただきました。感謝いたします。

コロナ禍のなか、東京オリンピックも終り世の中には  
静寂が戻ってきましたが、コロナウイルスの終息には至  
っていません。皆さんも気をつけてお過ごしください。

\*文責 石川正樹